

「お茶フクロウ (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

フクロウは樹木の「うろ」などに直接卵を産み、子育てをする「樹洞性営巣」をする。シジュウカラやヤマガラと同じ習性だが、親もヒナもサイズが大きい。営巣には相当な巨木の穴が必要で、北軽井沢のような山間地でも慢性的に「住宅難」に陥っている。私は専門家と相談して、フクロウ用の大きな巣箱を製作し、2009年に北軽井沢の森に設置した。



設置した翌年にさっそく営巣が始まり、2羽のヒナが巣立った。写真は巣立ち直前のフクロウのヒナが、巣箱から顔を出しているところだ。巣箱内の様子と、巣箱口の様子は、24時間赤外線カメラで録画し、東京からも遠隔観測が可能なシステムを作った。



これはオスの親フクロウが、巣箱に餌(ネズミ)を運び込んでいるところだ。ヒナに与えるエサはネズミが圧倒的に多い。巣箱は、私の山荘の裏庭の森に設置

した。私の山荘は古いので、屋根裏で時々ネズミの音がするが、フクロウが営巣している期間は、ネズミがほとんど姿を見せなくなった。



これは巣箱内のヒナの様子である。孵化直後は、ヒナも小さいので、母親がエサを小さく千切って与えていた。写真のヒナは孵化後、2週間以上たっているので、すでに小型のネズミを丸飲みできるまで育っている。親鳥がネズミを持ち込むと、ヒナはものの数秒で一気に飲み込んでしまう。



これは、3個の卵のうち2個が孵化した時の巣箱内の様子だ。興味深いのは、ネズミだけではなく、小鳥も運び込まれていることだ。写真でも右下に餌として運び込まれた野鳥(ヤマガラ)が写っている。夜中に小型の野鳥の「ねぐら」を襲って、巣に運び込むのである。

「お茶フクロウ」も、このあたりに定住・営巣しているなら、大量の生きた餌が必要だ。私はネズミよりも、むしろ小鳥を餌にしているように考えている。文京区にはまとまった大きさの緑地が多く、野鳥の種類も量も豊富だ。まずは、その餌を調査してみたい。